

猫と孫と

根来 滯子

猫

人生の最晩年で、「猫が生きがい」という生活に馴染むことになった。それは幸いなことかもしれない。猫とおばあさんが縁側で日向ぼっこをするという絵は平和の象徴でもある。無為なことは、何も起こらないこと、昨日も、そしてあるいは明日も同じような日常が続くというありがたいことである。高齢になるほど、そのありがたみを痛感する。「お迎えは いつでもいいが 今日はいや」というシルバー川柳があったが、それが本音である。見返りを期待することのない「無償の愛」をもって接し、その時を静かに過ごす猫との生活。

長いこと一人暮らしであることは何度も書いたし、わが愛する猫「グレイ」について描くのもこれが3度めである。数年前には「猫のいるレストラン」という題で、山麓にある素敵なフレンチレストランの、ベラ

ンダに置いてある木製のテーブルの上で猫がゆったりとまどろんでいて、その猫がなんとも味のある佇まいで猫に会いたくしてしばしば店を訪れたことをエッセイに書いた。友人が海老名の文化会館で行われた朗読の発表会で、この作品を取り上げてくれたこともあった。それは秦野市の有名な絵の先生のお嬢様が経営するレストランで、先生は大変な猫好きで猫を描いた絵が多く、猫を介して先生と親しくなったのはうれしいことであった。グレイに限らず、猫という動物はそこに存在するだけで心が安らぐ。

私はただ、かわいいとしか表現できないが、かの詩人であり劇作家の寺山修司は猫の性格の真髄を詩的に述べていて深く同感する。

「髭のある女の子、闇夜の宝石詐欺師、謎解きしない名探偵・・・」

また、作家の向田邦子の観察は次のようである。

「偏食、好色、内弁慶、小心、照れ屋、甘ったれ、体裁屋、凝り性、嘘つき、怠け者、」等々。惨憺ある言いがさだが、「私はそこに惚れているのです」と締めくく。引用した東京新聞のコラム「筆洗」の筆者によれ

ば、犬の飼い主への近づく愛情も愛おしいが、猫の人に
対する絶妙な距離感もまた魅力だ。それでいて猫はき
ちんと人を慰める。こちらが浮かぬ顔をしているとき、
犬は、大丈夫か、と大声で聞いてくれて、元氣を出せ
よ、と叫ぶが猫のやり方はちよつとちがつていて、「し
ようがないよ」と、そつとつぶやく。「不幸せという名
の猫」（1970年）は、浅川マキの歌で、作詞はやは
り寺山修司。たとへ不幸せでも、近くにいてさえくれ
れば私はいつも一人ぼっちじゃない、と情感込めて歌
う。（東京新聞「筆洗」より引用）

娘たちが幼稚園か小学校低学年のころ、1960年
代の末頃「黒猫のタンゴ」という童謡が人気を呼んだ。
リズムのいい曲で大人も楽しめる童謡であった。本来
はイタリアの童謡のようだが、日本では、当時7歳だ
った皆川おさむが歌った。タンゴを音楽用語と知らず
に猫の名前だと思っていたそうで、タンゴ大好きの子
はそれもいかなと思つてゐる。

「キラキラ光る黒猫の目、夜はいつもキミのものさ」
という歌詞だが、まさに、丸く見開いた闇夜の猫の目
は美しい。「女ごころは猫の目」ということわざもある
ほど、目まぐるしく変わる猫の目は吸い寄せられる魅
力を持つてゐる。

猫に關することわざも数多くあつて、人間社会に密
着していると感心する。「猫の首に鈴をつける」はフラ
ンスの評論家、ラフォンテーヌの名言で、「ネズミたち
が会議をして、猫が近づいてくるのがわかるように猫
の首に鈴をつけようということに決めた。しかし、そ
れを實行しようと名乗り出るネズミが一匹もいなかっ
た」という含蓄ある格言だ。窮地に立つた時、誰がそ
の矢面に立ち向かえるか、政治的にもよく引用される。
その他、「猫に小判」とか、「猫も杓子も」とか、「窮
鼠猫を噛む」、「猫を被る」等々。

私の愛する地域猫のグレイは、再び繰り返すが、「世
話をする人はいても飼い主のいない猫」と定義されて
いる。私をふくめて、複数の近所の人たちがそれぞれ
食事を与えている、我が家には夕方にやつてきて、ニ
ヤーンと食事をねだる。来訪を待ち構えている私は、
うれしくてそわそわしながら、グレイの好きなイナバ
のチャオチュールと、煮干しと三ツ星グルメの猫用餌
を与える。何度も足元にすり寄つて親しさを表現して
くれるが、食べ終わると、もつといてほしいと願う私
の期待など、どこ吹く風と、さつさと、次のかわいが
つてくれる人のところにいく。サッパリしたものだ。
2年半の付き合いで、猫の生態もだいぶわかつてきた。

犬は所有することができるが、地域猫は餌をやることのできるだけである、という猫の写真家、岩合さんのつぶやきが聞こえるようだ。猫はシャイなのだ。こちらがデレデレすると関係ありませんよとばかりに逃げたしてしまうのだが、用事があつて外出しようとして歩き出すと、何処からか姿を現し、やたらに寄つてきてすりすりし、歩行を妨げる。無視するとニヤーンと悲痛な声で後を追う。

「猫（と女は）呼んだときに来ないで、呼ばないときに寄つてくる」という定説を実感する。気まぐれで媚びたりせず、孤高の精神の持ち主かもしれない。たまに膝に乗ってきたりするが、それは私の膝が暖いから過ぎない。

縞虎オスのグレイは、もとはといえば、近所の蕎麦屋さんの飼い猫だったので大変に人懐っこい。どんな理由で家出をしたのかはグレイは話さないからわからない。孤独を好む性格のようで、同じ地域猫仲間の「ハナちゃん」と仲が悪く、出会うとお互い、シャヤーと威嚇し、毛をそばだてて、毒づいている。「コレコレ」と仲裁にはいる。

寝る場所も決まっていないうその日暮らし。極寒の冬

には、我が家のソファに寝て、電気毛布でほっこりしているが、春の気配を感じると、ねぐら定まらぬ放浪に身を委る、たまに我が家のベランダにしつらえたダンボール箱にタオルを敷きつめた寢床で寝ていることもあるが、猫仲間の家でもそのような場所を作っているのも、我が家で寝ていると私の頬は緩みっぱなし。寝顔を眺めているだけで心が温まる。夏のむつとした闇の中から、グレイが現れないかと、私は何度も玄関の戸をあけて外を眺め、待っている。ひたすらに待っている。まるで私が飼われているように。

12時を過ぎてもグレイは来ないとわかると、しょんぼりと鍵をかけ、しおしおとベッドに入る。どこで、何をしているのだろうかとあれこれ想像して、わが子のように心配しながら、グレイのために健康でいたいと切に願う。

また、デジカメで撮った写真をパソコンに取り込み、A4の用紙に印刷したグレイの大型の写真をバッグに入れて持ち歩き、友人たちとの食事会などでは折につけ、お披露目をしている、いつも優しい友人たちは、内心またか、やれやれ、と思っているに違いないが、微笑んで相手をしてくれる。相手は猫だから、孫自慢

よりはまじだと思っているかもしれない。なにしろ、老人仲間で孫自慢、子供自慢ほど辟易する話題はないからだ。猫嫌いの人でも聞き流せる話題だ。親しみを込めて私は訴える。

「グレイはまだ若く、毛もつやつやして、5歳くらいの年齢のようだから、私よりもずっと長生きすることでしょう。私がいなくなっても、人間に対して協調性のある性格だからかわいがってくれる人は次々と現れると思うし、心底から願っている」。

丸々と太った大きな体をドスンと横にして、顎を突き出し、撫でてくれといわんばかりにニヤンとなく。私はしもべよろしく、「はいはい」とそばにひざまずいて、猫が喜ぶといわれている、顎のした、耳の周り、頭、尻尾の周りなどをマッサージしてあげる。彼はうっとりした態度で全身を私に任せている。グレイと私の至福の時である。終わると未練たっぷりな私を顧みることなくさっさと出ていく。私を役に立つヘルパーだと思っているようだ。まったく情緒のない態度だがこれも猫の特性である、我が人生を顧みれば、すべてにおいて怠惰に過ごしてきたが、いまは、猫のために、猫と過ごす晩年こそ私にふさわしい生き方だと、満更でもない気分ですべて順応している。

8月も終わりに近いというのに、酷暑の収まらない某日、いつものように深夜、12時をまわり、玄関のカギをかける前にグレイの姿を求めて戸外を眺めていた。ブルームーンとかで、満月が煌々と木立を浮き上がらせている、その植え込みの深い闇のなかから、猫がのっそりと出てきた。「グレイ」と呼んだ。まさしくグレイと同じ、シマ虎の猫だが様子が違う。目を見張った。大柄なところも、鼻の先が白いところもグレイと全く同じだったが、決定的な違いは尻尾だ。グレイには尻尾がないのが最大のコンプレックスだと思うが、その猫はふさふさした長い立派な、見事な尻尾を持っている。猫と私と、お互いしばらく見つめあった。私はくらくらするほどの驚きで凝視したが、その猫も、逃げるわけでもなく、大きな瞳で私を見つめている。私にとってはその時間がかかり長く思えた。美形の猫は私を警戒しているようだったが、やがて、ゆったりと、道路の向こうの闇に消えた。あとを追ったがかげろうのように消えた。今のは幻覚だったのだから。まさか。

2、3日たって、猫仲間の知り合いに私が出会った猫の存在を尋ねた。飼い猫が夜おそく戸外をうろつくはずはない。猫仲間はそんな猫は知らないという。近

所の地域猫はシマ虎はグレイだけ、あとはミケのチビちゃん、ブチのハナちゃんだけだという。私はしっかりと見て心に焼き付けたのだ。12時をすぎると、今夜も戸外で待っている。

孫

昨年暮れ、アメリカ サンフランシスコの近郊に住む孫から、6月に、日本に行きたいという連絡があった。孫のビビアン・ロスは、イギリス人のステイブ・ロスと結婚して授かった私の長女、エリの娘である。エリは2019年末、55歳で卵巣がんを患って亡くなった。私の晩年に訪れたその不幸も繰り返して書いてきた。末期がんが発覚してから7年の闘病生活を送ったが、当時高校生と大学生だったビビアンとアンジェラという二人の娘を残してついに天に召された。3年半前のことである。

ビビアンは今年6月にサンタ・バーバラの大学院を卒業し、シアトルのアマゾン本社に就職が決まった。

8月から本格的な仕事に入るのその前に、日本を観光したいと言ってきたのだ。

しばらく会う機会がなかったが、時々、パソコンの

スカイプで近況を話し合っていたので、交流が途絶えることはなく、来日を大歓迎と伝えたのはもちろんである。エリが存命だったら、一緒に来日しただろうにと、また悲しみがこみ上げる。

1999年、イギリス人ステイブと日本で結婚式をあげたエリは彼の仕事の関係で渡米したが、私にあまり寂しさはなく彼女の新居を訪ねてカリフォルニアを観光した。西海岸は気候が温暖で、冬はオーバークートが必要ないほど暖かく、夏は日本のように蒸し暑くない。私は1月から2月にかけて避寒のためという理由をつけて渡米し、1カ月単位の長さで滞在中、アメリカの日常生活を経験した。往復の一人旅は70代半ばになるまで7、8回続く。

しかしロマンチックな気分の一人旅も、広大なサンフランシスコ国際空港の雑踏は異国の人がかり、私の不注意から、ゲートを間違えて、危うく日本行き飛行機に乗り損ねるというトラブルを経験してから、行動に自信がなくなり、億劫になって70代後半から次第に足が遠のいていったのだ。

ビビアンが生まれたのは20世紀の終わり、2000年、ミレニアムの1月6日だった。エリの初めての出産だったので、私はいそいそと渡米した。エリは最

初、シスコの北、ゴールデンゲートブリッジを渡って車で一時間あまり、ペタルマといういかにも古い都市に住んだ。のちにサンノゼの近郊に引越すのだが、私の中ではペタルマは強烈な思い出のある街である。

街の成り立ちの歴史はしらないが、いかにも歴史的建造物といえるような趣のある建物が多く、西部劇に出てきそうな古き良き時代のアメリカをおもわせる風情があった、車社会のアメリカでは自宅から徒歩でショッピングモールに行けるような街はあまりないと思われるが、ペタルマは娘の住居のすぐそばに二か所もあって、散歩コースのダウンタウンは、木造のレストラ

ンやアンティークショップが並び、雰囲気満点の街であった。すべて、徒歩圏内にある店を私は毎日のように散策し、年季の入った店内を歩き回り、クラシックコーヒーマイルやヴィンテージの小皿、ガラスのカップなどを買って楽しんだ。街中を縫うようにペタルマ川が蛇行していて、川に突き出したベランダ風のコーヒショップで、娘とよくコーヒを飲みに行った。澄みきった川とは言い難かったが、ゆつたりとさざ波を湛えた流れは、中世の街にフラッシュバックしたように、不思議なデジャブの感覚に浸った。

1999年、世紀末のクリスマスを、ペタルマで過

ごした。リビングの天井に届くかと思うほどのクリスマスツリーに満艦飾の飾り物をつるし、何人かの友人へのプレゼントが並んだ。私宛てにはコーチのショルダーバックが紙袋につつんであった。エリの夫のステイブがオーブンで焼いた鳥の丸焼きはグロテスクで、日本人の私にはあまり食欲の沸く料理ではなかったと記憶にある。

2000年、ミレニアムの新年は、サンフランシスコ市で轟音とともに火花があがり、娘夫婦は友人宅に招待されて、朝まで帰ってこなかった。オールナイトで新しい年を祝ったらしい。

2000年1月6日、ビビアンが誕生した。日本の風習を踏まえて、実家の母が手伝いに行くものとはかりに渡米したのだったが、大いに見当違いであった。お産前後のケアはすべて夫のステイブの仕事であった。私はただ、無事に生まれたという報告を受けて病院に駆け付けただけで、日本とのお産の違いに愕然としたことも以前に書いた。現在は日本でも産後は寝込んだりしないようだが、24年も前、アメリカのお産はたった一日の入院だけで翌日には退院するのである。生まれたての赤ん坊は帽子をかぶせられ、毛布でぐるぐる巻きにされ、すぐに母親のそばに寝かされる。



袖口のゆったりした新生児用の産着をさせられ、新生児室に隔離される日本との違いに驚いた。おまけに生まれたての赤ん坊を看護師が抱きかかえて、「オー、オリエンタルベビー」などと浮かれて廊下を歩き回り、通りかかる人たちに「かわいいでしょ」とばかりに見せているのである。お産が終わったばかりの翌日、エリはふにやふにやの赤子をだいて退院した。帰宅してからも私の出番はなかった。アメリカ全体がそうなのかは知らないが、ミルクを与えたり、おむつをかえたり、すべてステイプの仕事なのだ。私はただ見守っているだけ、時々抱かせてもらうが、エリは不安そうに私の手元をみていた。

その2年後に次女アンジェラが生まれる。2人とも、アメリカとイギリス、日本の三つの国籍を持つて誕生

したが、20歳の成人を迎えたとき、一つの国を選択することが法律で定められていて、アメリカに居住し、アメリカ人としての人生を歩いていくのは当然のことであろう。

6月半ば、ビビアンとボーイフレンドのトマスを迎えに、駅の改札口にたっていた。

トマスは、ビビアンが趣味で参加している地元のオーケストラでフルートを演奏していたのだが、そこで知り合った音楽仲間のボーイフレンドであるそうだが、

二人の関係がどの程度のものか、一緒に旅行するのだから、かなり親密だと思ふのだが、彼は日本は初めてで、父親が歴史の教師をしていることから、日本に興味を持ち、ぜひ一緒にという希望だったので受け入れることにした。私はホームステイのおばあさんというわけだ。彼らが滞在する間、私はサークル活動もお休み、数人の友人たちとのランチもお休み、もっぱら二人のお世話に専念すると公言した。東京の娘が成田から新宿行きのバスを指定し、新宿から小田急線の乗り場まで案内し、新宿発の正確な時間を指定してきたので、夕刻の7時過ぎ、駅で待つことにしたがまもなくビビアンが現れ、すぐに私を認めて手をふり近づいて

きた。青いジーンズに白のTシャツ、「しばらく!」と挨拶したが、いつも会っているようなビビアンであった。

後ろからのそのそとトマスが姿を現した。初対面だがビビアンが一緒だとこれも違和感がない。「こんばんは、よろしく」と妙なアクセントでニコニコ顔である。

典型的なアメリカ人の体形で脂肪を持って余しているようだった。私は駅前のケンタッキーフライドチキンで夕食のために買ったハンバーグとフライドチキンをもつて3人でタクシーにのった。

ビビアンは12年前、12歳の時、夏休みを利用して、エリとアンジェラと3人で来日していたので、我が家から駅までの道順や近所のコンビニ、スーパーなども、当時のことをよく記憶していて、私があれば指示する必要がなかった。彼女にとつて秦野はすべて懐かしい風景だったのだ。まして今はスマホの時代である。電車の時間も道順も観光の名所もすべてスマホが教えてくれる。私はただ、神奈川生協の宅配で2人の食料を買い込み、冷凍、冷蔵食品で冷蔵庫を満タンにして足りないものはないか、点検することであった。パンやチーズはもちろん、パスタやカレー、オムライス、餃子やシューマイ、ハンバーグ、等々。ア

メリカには「遠慮」という文化がないのだろうか。トマスはまったく自由に冷蔵庫を開け、いつも物色している。ポテトフライやココア・コーラなど、大好きなのだ。

サンフランシスコから成田まで、10時間余のフライトだが、2人はあまり疲れたようすもなく翌日から歩き回った。12年前と違って、ママのエリはいない。日本の思い出の中に鮮明に焼き付いているママの在りし日をたどっているようだった。私も彼女の中にエリの面影を見て、切なくなつたが、きっとエリは、病気が重くなり、果たせなかつた来日をビビアンが実現したことを喜んでいるに違いない。

鎌倉、江の島、小田原はもちろん、東京の次女が都内のホテルを2泊予約して案内した。外国人が必ず訪れるという定番の、浅草からお台場へ隅田川を船で。新宿、渋谷など、若者が喜びそうな繁華街を申し分なく案内した。日本は大抵の国の料理が食べられる。味付けも満点、デリケートで奥行きが深いことに感心していた。

月島のもんじゃ焼きが珍しかったようである。大阪や京都、奈良など、観光地はいたるところ外国人であふれているとニュースで放映しているが、彼女たちも

まさしくその中の2人である。帰宅するたびにその日の出来事を話し、スマホで写した写真を見せてくれた。たどたどしい日本語で一生涯懸命に説明してくれる。奈良公園のシカに追いかけて必死に逃げたこと、小学生の団に囲まれて外国人としての感想を質問されている回答のこと、いつの間にか彼らとの話題が楽しみで帰宅を待つようになった。私は地元のお寿司屋さんと和食の店を案内したが、お刺身や天ぷらなど、大好物だととても喜んでくれた。

帰国の前日は、雨だったこともあり、さすがに一日家の中で過ごした。アルバムを広げ、エリの生い立ちの歴史を語り合った。スコットランド育ちのステイブと結婚をして、アメリカで21年を過ごして2人の娘を残してエリは去った。異文化のなかで子供を育て、地域に順応し、素晴らしい家庭を築いた21年だった。エリの血を分けた孫がいる。ママ仕込みの日本語の会話が上手で、とても丁寧だ。「めっちゃ、いいね」とか「すごい」「やばい」とかいいう現代の日本の若者に定着している言葉は絶対に使わない。母親から受け継いだ、かつての日本女性の丁寧な言葉を聞いて懐かしかった。エリの結婚前の数枚の写真をファンだという村上春樹の本の中には喜んでバッグにいれた。

我が家には丸2週間の滞在でビビアンとトマスは7月初め、思い出の一杯つまったキャリーバッグを引かずって日本を去った。次はドバイに行くらしい。これからまた半月かけてドバイやギリシャ、イタリーを回る予定とのこと。駅の改札口まで送って別れた。トマスにとっても日本の印象は素敵なものだったと思っっている。小学生用のノートに「あいうえお」と書いて勉強らしきことをしていたが、マスターするには数年はかかるだろう。次に来日するときは結婚しているのだろうか。それまで私は元気でいられるだろうか。これが最後の別れになるのだろうか：

私はまた、以前のように親しい仲間たちとサークル活動をしたり、ランチをしたりする生活に戻った。「孫たちがアメリカから来るのよー」と報告したとき、友人たちは「あら、大変ねー」と同情してくれた。「お孫さんに会えるの楽しみでしょうー」と言ってくれる友人はいなかった。「アメリカに帰ったよー」と報告したら「やっつと、ホットしたでしょう」と喜んでくれた。「寂しくなったでしょう」と言う発想はないようであった。

(2023年 9月)